まえがき・解説

本プロジェクト・ペーパーは三部構成になっている。

第一部には大森美紀彦氏の論文———「現在の国際政治状況と国際政治＜学＞状況に対するオールタナティブな一試論—高坂正堯『国際政治』・寺島実郎『世界を知る力』・石積勝「3つの戦争を再考する」の比較を通じて」———が掲載されている。大森氏は神奈川大学経営学部で長年「政治学」を担当されているが、つい最近（2010年3月）、話題の著『日本政治思想研究—権藤成卿と大川周明』（世織書房）を出版された。この力作は日本政治思想史の範疇にはいるが、最近の同氏の関心は日本政治思想史の領域を越えて政治学一般理論の再構築に向かっている。そうした問題意識を共有するメンバーの集合体として「比較日本研究会」が組織されている。この「比較日本研究会」では水先案内人として故神島二郎氏、そしてその神島氏の手になる政治学グランドセオリー再構築の試みとしての＜政治元理表＞を参加者それぞれ、強弱の差はあっても意識しているのであるが、大森氏はその中でも最も神島政治学を理解し、また同時にそれを世に問うことに熱心な、研究会の中心メンバーである。「比較日本研究会」では政治現象を国内政治・国際政治を問わずに、ありとあらゆる角度から取り上げるが、本論文———「現在の国際政治状況と国際政治＜学＞状況に対するオールタナティブな一試論—高坂正堯『国際政治』・寺島実郎『世界を知る力』・石積勝「3つの戦争を再考する」の比較を通じて」———もまたこの研究会での同氏の発表をベースに著されている。
大森氏は、誰もが無視することのできない、いわゆる「現実主義」の立場からの国際政治学の大御所、故高坂正堯氏の国際政治学の古典ともいえる『国際政治』（中公新書）をまず手堅く押さえ、虚心坦懐にそれに一定の評価を与え、対照的に政治的リベラルの見地からの寺島実郎氏の『世界を知る力』（PHP新書）を論じ、さらに21世紀政治現象を理解するには政治学もまたラジカルに変貌を遂げなければならないとする石積による論文「三つの戦争を再考する」を取り上げている。この大森氏による論文は現在進行中の、そして来年にはその成果の一部を発表する予定の研究所プロジェクト「政治学グランド・セオリーの新展開」のいわば序章的な意味合いをもつ。

第二部はガラッと変わって、原学氏のエッセイ風な論文「国際貢献で村お興し」を掲載した。原氏は長年、朝日新聞国際部に勤務しジャーナリズムの第

一線で活躍されてきた方であるが、今回寄稿頂いた論文「国際貢献で村お興し」は極めてユニークな国際貢献についての紹介である。原氏はそのユニークな国際貢献の考え方、つまり「からいも交流」の基本理念を、その主催者である加藤氏の言葉を紹介し、それが、「画一に対する個別と多様性、集権に対する分権、中央に対する周辺、都市に対する農村、国権に対する人権」、つまり明治の近代化以来軽んじられてきた諸価値に新しい光を当てるものだと論じる。

第三部は石積の読書ノートをそのまま掲載させてもらった。読書ノートといっても生のレジュメであり、読者には理解不能の部分も相当あると思われるが、これは自分自身の今後の思索・研究のための覚え書きであり、今後の政治学グランドセオリー再構築、あるいは神島政治学元理表の具体的展開のための材料と位置付けている。読書ノートについてはその第三部冒頭で取り上げる６つの著作についての簡単な解説を掲載しているが、一部、二部、三部に共通している全体を通じての留意点を下に記す。

1) 第一部の大森論文と第三部の石積の読書ノートでは頻繁に神島二郎の政治元理表が登場する。その元理表を目にしたこともない読者にとってはわかりにくい面もあろう。この元理表は本プロジェクト・ペーパ第一論文、大森美紀彦氏の「現在の国際政治状況と国際政治＜学＞状況に対するオールタナティブな一試論—高坂正堯『国際政治』・寺島実郎『世界を知る力』・石積勝「3つの戦争を再考する」の比較を通じて」に紹介されている。さらにもう一度、本プロジェクトペーパーの末尾にその全体の表を添付した。また、この神島政治学あるいは政治元理表については大森・石積が経営研究所プロジェクト「政治学グランド・セオリーの新展開」のプロジェクト・ペーパー（2011年度発行予定）で詳述する予定である。

2) 第三部、石積読書ノートは形式が統一されていない。ある場合は著書の要約のみとなっているし、多くの場合は要約＋石積のコメントとなっている。その石積のコメントについても単なるコメントと、かなり本格的な「論考」がある。さらにその「論考」も必ずしも文章としても、また内容としても完結していない場合もある。そうしたものもすべて今後の研究のための材料として、即ち「覚え書き」として、自分自身のために、ここに掲載した。お許しいただきたい。

3) 上記第三部においては石積自身のコメント、論考の部分はすべてイタリック体、網掛けで示した。したがってその他の部分は石積の手になる著作の要約、すなわちレジュメである。